

ホワイトヘッドの「具体性」とは何か

著者の幅広い哲学研究と論述

伊藤重行

森元齋 著

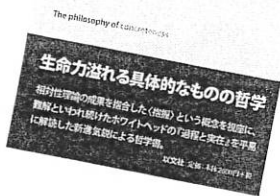
▶ 具体性の哲学

ホワイトヘッドの知恵・生命・社会への思考
11・15刊 四六判320頁 本体2600円
以文社

森元齋

具体性の哲学

ホワイトヘッドの知恵・生命・社会への思考



森元齋氏の最初の論文を説いたのは、約五年前の「プロセア思想」第14号(日本ホワイトヘッド・プロセア学刊)に掲載された「経験と主体——ドゥルース哲学とホワイトヘッド哲学の差異について」であった。その後彼の論文が掲載されなかった。どうも、たの気がなっていた。しかし彼の本書『具体性の哲学』を読むと、フランスに留学していたことが分かった。彼の哲学研究の幅の広さから考察して、これから将来にわたって期待できる日本の哲学者になるであろう。

ところでこの書評を書く機会が与えられて、ふと振り返って見ると、今から五十年も前のことが思い出される。学生運動が荒れていた頃であり、左翼的傾向の強い時代であった。時代の流行に乗らなかった拙者は、ひたすら神田神保町の古書街を散策していた。

た。日本の左翼的な研究者がラッセルに関心をもっていたのは、ラッセル自身は自分の先が、ラッセル自身は自分の先生がホワイトヘッドであり、しかも完璧な先生であったと断言していた。百科事典のフリスニカの数学欄がホワイトヘッドによって書かれていた。

そのころ大島豊の『宇宙論』などを購入し、読んでいた中にホワイトヘッドがあった。この当時も既に『科学と近代世界』が翻訳されていた。『数学入門』(神田の古書店で発見して購入)も新島の出版社から翻訳出版されていた。数学者から形而上学を構築したことに興味を持ち、ひとりで原書『過程と実在』を読んでいた。驚きは1980年に入って日本ホワイトヘッド・プロセア学会が澤田允茂教授(慶應義塾大学)のラッセルとホワイトヘッド——

を学習院大学で開催することによって——シャヴィロとハーマンへの応答」のことは日本でのホワイトヘッド研究が本格的になった事を意味する。ホワイトヘッド研究でお世話になった澤田允茂先生、市井三郎先生、藤川吉美先生、鶴見俊輔先生はもう既に他界している。

「第一部 具体的なもののほうへ」で、「I章 ホワイトヘッドとラッセルにおける空間論の交差と乖離」「II章 ホワイトヘッドと相対性理論」「III章 (注意、原著は2章になっているが間違っている) 経験の罪——ホワイトヘッドとベルクソン」「IV章 (注意、原著は3章になっているが間違っている) 不共可能性のほうへ——ライプニッツ主義ドゥルースにおけるホワイトヘッド哲学」「V章 実在

は単純に広義の「ある『存在』」で、そこに形容詞の actual を付けて静的概念から動的概念(意味づけているところにホワイトヘッドの個性を感じる)になったらホワイトヘディアラになった(つまり)である。とここで初期の出来事は泡の様なあり方と理解すればよいであろう。ここでは紙面の都合で後期の現実的実質を扱ってみたい。もちろん森元齋もこの現実的実質を現実的存在として論じている。この現実的実質は、把握 (prehension)、結合体 (nexus) を要件として成り立っているのだから、知恵と生——ベルクソン、大杉、ホワイトヘッド——の概念を理解するために、ホワイトヘッドの主著『過程と実在』を読むことになる。この主著の最初の訳者は山本誠作で、二番手の訳者として平林康之ものが刊行された。拙者の頃は原著そのものを熟読したので、訳本が現れたからは苦労が少し削減されたが、今度は訳本の中にあるホワイトヘッドの独特の概念に悩まされることになる。しかし森元齋の場合も、中沢新一氏の推奨の言葉の中に「ホワイトヘッドから始めたらどうか」といったことがあったというので立派な推奨の言葉だと思つて、

さて読者は「現実的実質」を「ウィロ、ハーマン、ラッセル、ドゥルース、シャヴィロ、ウーラック等の論説を縦横に使い議論している」ので森元齋の目指す「具体性の哲学」が理解されるであろう。もう二十年も昔のことであるが、故鶴見俊輔氏と出会って話した事が思い出され、彼がホワイトヘッドの最後の講演であった「不滅性」についての「eternities is fake (正確さはインチキだ)」と語り、ゆっくり、静かに終わったことを「四〇年たつて耳にとどく」と記していたので訊いてみた。彼はその意味を今でもよく分からないと語つたので、ホワイトヘッドの場合あらゆる現実的実質が生成し発展していく合生過程となすので、正確さも瞬間、瞬間で変化するのでホワイトヘッドの人間としての謙虚さと拙者が語り、ホワイトヘッドの独断や偏見を排した表現など話したことが思い出される。森元齋が言うように故鶴見俊輔氏は金子みすゞに結びつけてアナキズムを論じていたが、この点は賞成できない。英国のアナキストのカーペンター、フランスのエリーゼ・ルクリュヤや日本の石川三四郎、望月百子などを論じなければ、ホワイトヘッドをアナキズムに結びつけるのは危険だと思つた。本書には若干の校正上の問題があるが、目次を気にしないで本文を読むことをお勧めする。増刷の時に訂正するでしょう。日本の哲学者森元齋の今後を期待したい。(日本ホワイトヘッド・プロセア学会理事、松蔭大学経営文化学部教授)

「第一部 具体的なもののほうへ」で、「I章 ホワイトヘッドとラッセルにおける空間論の交差と乖離」「II章 ホワイトヘッドと相対性理論」「III章 (注意、原著は2章になっているが間違っている) 経験の罪——ホワイトヘッドとベルクソン」「IV章 (注意、原著は3章になっているが間違っている) 不共可能性のほうへ——ライプニッツ主義ドゥルースにおけるホワイトヘッド哲学」「V章 実在

は単純に広義の「ある『存在』」で、そこに形容詞の actual を付けて静的概念から動的概念(意味づけているところにホワイトヘッドの個性を感じる)になったらホワイトヘディアラになった(つまり)である。とここで初期の出来事は泡の様なあり方と理解すればよいであろう。ここでは紙面の都合で後期の現実的実質を扱ってみたい。もちろん森元齋もこの現実的実質を現実的存在として論じている。この現実的実質は、把握 (prehension)、結合体 (nexus) を要件として成り立っているのだから、知恵と生——ベルクソン、大杉、ホワイトヘッド——の概念を理解するために、ホワイトヘッドの主著『過程と実在』を読むことになる。この主著の最初の訳者は山本誠作で、二番手の訳者として平林康之ものが刊行された。拙者の頃は原著そのものを熟読したので、訳本が現れたからは苦労が少し削減されたが、今度は訳本の中にあるホワイトヘッドの独特の概念に悩まされることになる。しかし森元齋の場合も、中沢新一氏の推奨の言葉の中に「ホワイトヘッドから始めたらどうか」といったことがあったというので立派な推奨の言葉だと思つて、

さて読者は「現実的実質」を「ウィロ、ハーマン、ラッセル、ドゥルース、シャヴィロ、ウーラック等の論説を縦横に使い議論している」ので森元齋の目指す「具体性の哲学」が理解されるであろう。もう二十年も昔のことであるが、故鶴見俊輔氏と出会って話した事が思い出され、彼がホワイトヘッドの最後の講演であった「不滅性」についての「eternities is fake (正確さはインチキだ)」と語り、ゆっくり、静かに終わったことを「四〇年たつて耳にとどく」と記していたので訊いてみた。彼はその意味を今でもよく分からないと語つたので、ホワイトヘッドの場合あらゆる現実的実質が生成し発展していく合生過程となすので、正確さも瞬間、瞬間で変化するのでホワイトヘッドの人間としての謙虚さと拙者が語り、

は単純に広義の「ある『存在』」で、そこに形容詞の actual を付けて静的概念から動的概念(意味づけているところにホワイトヘッドの個性を感じる)になったらホワイトヘディアラになった(つまり)である。とここで初期の出来事は泡の様なあり方と理解すればよいであろう。ここでは紙面の都合で後期の現実的実質を扱ってみたい。もちろん森元齋もこの現実的実質を現実的存在として論じている。この現実的実質は、把握 (prehension)、結合体 (nexus) を要件として成り立っているのだから、知恵と生——ベルクソン、大杉、ホワイトヘッド——の概念を理解するために、ホワイトヘッドの主著『過程と実在』を読むことになる。この主著の最初の訳者は山本誠作で、二番手の訳者として平林康之ものが刊行された。拙者の頃は原著そのものを熟読したので、訳本が現れたからは苦労が少し削減されたが、今度は訳本の中にあるホワイトヘッドの独特の概念に悩まされることになる。しかし森元齋の場合も、中沢新一氏の推奨の言葉の中に「ホワイトヘッドから始めたらどうか」といったことがあったというので立派な推奨の言葉だと思つて、

さて読者は「現実的実質」を「ウィロ、ハーマン、ラッセル、ドゥルース、シャヴィロ、ウーラック等の論説を縦横に使い議論している」ので森元齋の目指す「具体性の哲学」が理解されるであろう。もう二十年も昔のことであるが、故鶴見俊輔氏と出会って話した事が思い出され、彼がホワイトヘッドの最後の講演であった「不滅性」についての「eternities is fake (正確さはインチキだ)」と語り、ゆっくり、静かに終わったことを「四〇年たつて耳にとどく」と記していたので訊いてみた。彼はその意味を今でもよく分からないと語つたので、ホワイトヘッドの場合あらゆる現実的実質が生成し発展していく合生過程となすので、正確さも瞬間、瞬間で変化するのでホワイトヘッドの人間としての謙虚さと拙者が語り、

は単純に広義の「ある『存在』」で、そこに形容詞の actual を付けて静的概念から動的概念(意味づけているところにホワイトヘッドの個性を感じる)になったらホワイトヘディアラになった(つまり)である。とここで初期の出来事は泡の様なあり方と理解すればよいであろう。ここでは紙面の都合で後期の現実的実質を扱ってみたい。もちろん森元齋もこの現実的実質を現実的存在として論じている。この現実的実質は、把握 (prehension)、結合体 (nexus) を要件として成り立っているのだから、知恵と生——ベルクソン、大杉、ホワイトヘッド——の概念を理解するために、ホワイトヘッドの主著『過程と実在』を読むことになる。この主著の最初の訳者は山本誠作で、二番手の訳者として平林康之ものが刊行された。拙者の頃は原著そのものを熟読したので、訳本が現れたからは苦労が少し削減されたが、今度は訳本の中にあるホワイトヘッドの独特の概念に悩まされることになる。しかし森元齋の場合も、中沢新一氏の推奨の言葉の中に「ホワイトヘッドから始めたらどうか」といったことがあったというので立派な推奨の言葉だと思つて、